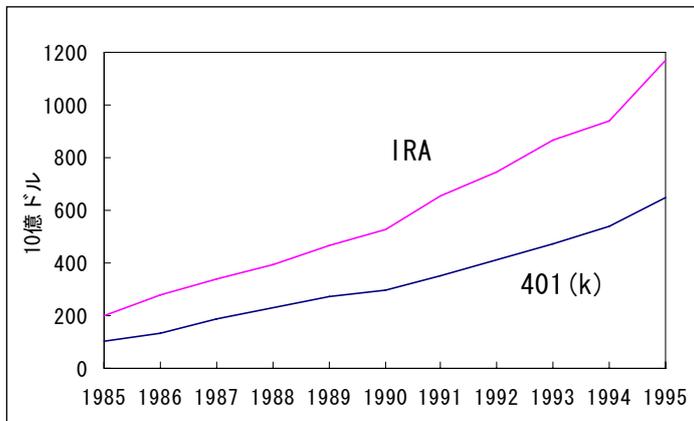


アメリカにおける年金運用（2） - 掛金建て年金の運用

今回は、近年、アメリカで人気が高まっている、401(k)プランや IRA など、掛金建て（確定拠出型）制度の運用について紹介する。

掛金建て制度として、企業年金の 401(k)プランと、個人年金の IRA（個人退職積立勘定）とは、どちらも、個人がリスク負担して、年金積立金の管理・運用する点で共通である。図 1 は、1985～1995 年の資産残高の推移を示している。近年、急成長の 401(k)よりも、引続き、IRA の残高が大きい。

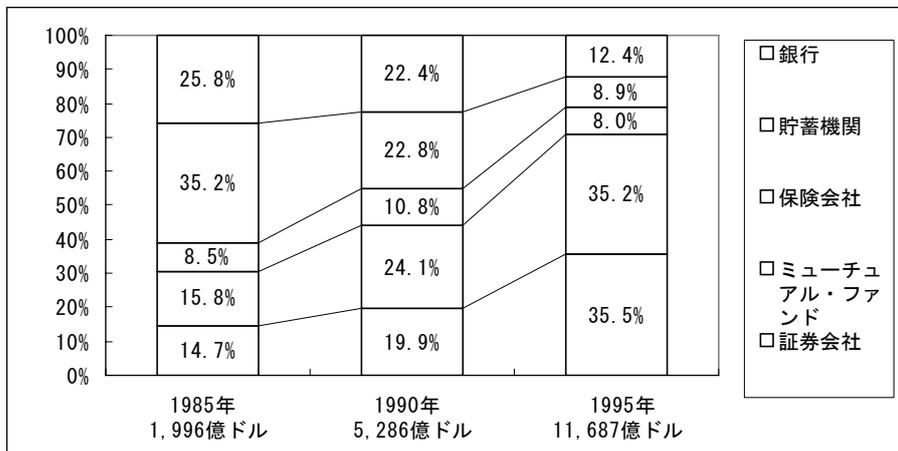
図 1 IRA と 401(k)の資産残高の推移（1985－1995 年）



(出所) ICI、Bernstein Research

1981 年から、企業年金加入者も IRA を利用できるようになったため、特にミューチュアル・ファンドの利用が増加した。図 2 は、IRA の運用金融機関シェアの推移を示したものである。銀行、貯蓄機関の占率が減少する一方で、証券会社とミューチュアル・ファンドの占率が、ともに、この 10 年間で倍以上になっている。

図 2 IRA 個人年金の運用金融機関シェアの推移

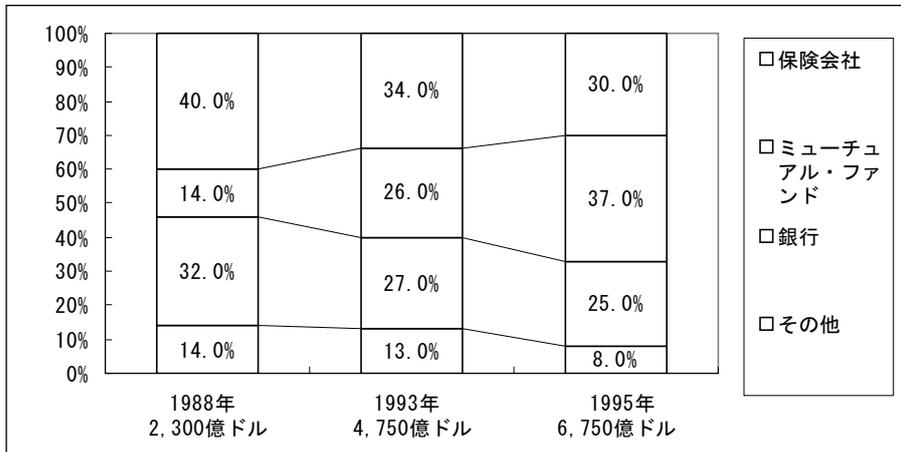


(出所) ICI

401(k)プランでは、加入者が、企業が提示する複数の選択肢の中から、投資対象を決定する。受託者責任免責基準の制定（1992年）以降、企業は「リスク・リターン特性の異なる投資選択肢を3種類以上（自社株を除く）用意し、3ヵ月に1回以上、選択肢の組替えを可能にする」ことが必要であり、加入者は、リスク許容度に応じ分散投資を実現できる。GIC（利率保証契約）、株式（インデックス、主要株、成長株、自社株）、バランス型、債券（短期、長期）など、5～7の選択肢を提供するのが一般的である。

図3は、401(k)プランの運用金融機関シェアの推移であるが、ミューチュアル・ファンドの残高が急増する一方で、商品種類が限られて、時価評価や組替え頻度が月1回程度と少ない、銀行や保険のシェアが低下している。なお、保険については、最近、IRAや401(k)の限度超部分で、税制メリットを生かして、ミューチュアル・ファンドを運用対象とする変額年金に加入し始めた顧客がいると報じられている。

図3 401(k)プランの運用金融機関シェアの推移



(出所) ICI、Bernstein Research

401(k)プランで、ミューチュアル・ファンドのシェアが急伸したのは、単なる運用に止まらず、「バンドルド（抱き合わせ）・サービス」による、企業の経理処理の簡便性、従業員に対する投資教育システムの充実、1-800番（フリーダイヤル）による従業員の照会が可能など、サービスの充実が原因であろう。他にも、日々の時価を把握可能な商品特性、豊富な品揃え（8,000種類）、高パフォーマンス商品の存在、売買や乗り換えが容易、などの特長がある。

今回は、アメリカの掛金建て制度の運用手段として人気のある、ミューチュアル・ファンドについて取り上げる。